

その声が波音にかき消されないために

辻内琢也・トム・ギル（編）2022『福島原発事故被災者 苦難と希望の人類学——分断と対立を乗り越えるために』明石書店。

砂浜を海の方に向かって、3人が並んで歩いている。後ろ姿だが、親子のようだ。他には誰もいない。真ん中は、明るい色のオーバーサイズのジャンパーを着た、小学生ぐらいの女の子。楽しげに足元の砂を見ている。その右に男性。眼鏡をかけ、マスクをし、薄手の黒のダウンを着ている。隣の2人を見ているが、後ろ手に組んだ手にスマホを握り、そちらにも気がいっているようにも見える。左側に女性、ダボツとしたコートとスカート、肩には大きなバッグ。子どもは楽しそうだが、大人からはどこか疲れた印象も受ける。母子と父の再会、と見るのは深読みしすぎだろうか。かれらの後ろに広がる砂地の荒れぐあいは、これまでの歩みの困難さを思わせる。かれらの前の砂はきれいに平らで、何も道しるべはない。母は前方を向いている。その視線の先には、白波の立つ海がある。その先にぼんやり見える対岸には、木立が壁のように立ちふさがり、視線をさえぎる。その上からわずかに何本かのクレーンと鉄塔がのぞく。夫婦はこの施設が何かよく知っているだろうし、読者も推測できる。だが、そこで何が行われているかを見通すことはできない。

本書の表紙を飾る、一見ありふれた、しかし示唆的な光景の写真で気になるのは、前を見つめる母だ。彼女はここで何を思うのだろうか？ その口から出るのは、誰に向かう、どのような言葉なのだろうか？ その言葉に、父親は、そして子は、どう反応するだろうか？ その声は、海——こちら側と対岸とを分断し、声を波音でかき消そうとする——を越えた先にいる者たちに届くだろうか？

本書は、2011年3月に発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故によって被害を受けた人々の10年余の「苦難」の経験を描き出す論集である。執筆者は、国内外の多様な場所に拠点のある、文化／社会人類学、心理学、政治・社会学など異なるバックグラウンドをもつ13人の研究者である。かれらは、「自主避難」を続ける人々、帰還した人々、高額な賠償金を受けた人々、都内の高層マンションに避難した人々、市民として放射能測定を行う人々など、けっして「被災者」と一括りにできない多様な人々の現実を、きわめて生々しく、また重苦しく浮かび上がらせる。

「人類学」という名を冠する本書の強みの一つは、そうした人々の微細な差異に気を配り、複雑な事態や心情から目を逸らさずに丁寧に記録していく姿勢である。各章では、避難先での孤立やいじめ、賠償金をめぐる妬み、女性たちをめぐる家族・親族内での葛藤や身動きのとれなさ、政府や自治体による政策決定に逆らえないが納得できない思いをもち続けることなどの、事故後から現在に至る、そしておそらく今後も続く人々の「苦難」が克明に記述されている。数多く引用された当事者たち自身の言葉、および端々で描かれた等身大のふるまい——ウィスキーをバチャバチャと注ぐこと、車のフロアマットの代わりにプラスチック製の靴入れを使うこと、久しぶりに戻った故郷でキツネと見つめ合うこと、子どもに出された地元産品を「大人味だから」とごまかして代わりに食べてしまうこと、等々——は、読者に、本書に登場する人々とその苦しみを、いままさに同じ社会を生活している隣人として受け止めさせる。

本書を（つまり様々な当事者の経験を）通底するのは、かれらを翻弄し、苦しめる「分断」だ。それは外から想像されるような、シンプルな線引きによるものではない。編者のギルは、彼が付き合ってきた人々の状況を分断した要因として6つを挙げる。それは、被害の原因（「天災」か「人災」か）、住んでいた場所（政府による避難区域の線引きの内外）、家族構成、震災前に不動産を所有していたか否か、震災後再就職したか否か、および時間が経つなかで政府が強制避難区域の中に新たに引いた線引きだ。これらは賠償金と連動し、微細で複雑な、しかしいったん線が引かれれば相互のコミュニケーションを不可能にする強烈な分断を、人々の間に生み出した。さらに人々は、そうした分断の中で、政府の一方的な政策の変化に合わせて、どこに住むのか、どう暮らすのか、意思決定を迫られる。編者の辻内の整理に従えば、震災から現在までは、避難・離散拡大期、避難指示再編期、避難解除／帰還促進期、そして自主避難者に対する住宅支援の打ち切りから現在に至る、原発事故強制終了／棄民政策加速期と呼ぶ時期に分けられる。こうしたフェーズの展開の中で、分断はますます複雑になり、人々の相互無理解が深まっていく。人々は他者の言動に傷つき、苛立ち、まとまって被害や苦しみについて声をあげることがますます難しくなる。

人々が置かれたこうした状況は、辻内がポール・ファーマーから受け継いだ言葉をもじって言えば、「急性増悪の慢性化」だと言えるかもしれない。原発はこの地域を取り巻く歴史的に形成された政治経済的な文脈のもとで建設され、操業され、事故を起こした。しかしその被害は、ここまで長く、複雑に、そして深刻にならざるをえなかったのだろうか？ 事後が起きて以降現在に至る10年余に、被害を大きく、そして長く続くものにしてしまったのは何なのか、目を向ける必要がある。それは紛れもない、政治と社会による暴力だ。確かに構造によって生み出されているけれども、しかしそれを「構造的暴力」と呼んでしまうと、むしろ加害者が存在していることを隠してしまうのではないか。線引きと賠償金で人々を分断し、さらに「自主避難」を「本人の責任」と切り捨てる政府と東京電力、そして加害者の責任を認めず、被害者を救済しようとしぬ裁判所。しかしそれだけではない。当事者が被っているのは、社会の一人一人による暴力でもある。かれらの苦しみを慢性化させているのは、自らも不安を抱え、疲弊し、寛容さを失い、身動きがとれなくなっている、この社会で生きる私たち自身であるということを、受け止める必要がある。

波のように繰り返す災厄と深刻化する分断のなかで、あの親子の声がかき消されないように、私たちは耳を傾けねばならない。そして、かれらとともに声を発さなければならない。聞く耳をもたない者たちの耳に、私たち自身の耳に、その言葉が届くまで。本書10章で描かれる、経験を何とか語ろうとする当時の子どもたちのように、そしてかれらがまだ語りえないものを何とか代弁しようとする若者たちのように。かれらの、そして私たちの言葉が耳に届くまで、決して口をつぐまないこと、終わりを迎えさせないこと。希望はその力だ。